コラム：日台交流の現場から

「海角七号」に、台湾政治を想う

（財）交流協会専務理事　井上　孝

台湾で最大のヒット作となり、日本でも話題を集めた台湾映画「海角七号」をご覧になった皆さんは、登場人物の誰に一番興味をお持ちになったでしょうか。主人公の阿嘉でしょうか、田中千絵が演じた友子でしょうか、自称「人間国宝」の茂じいさんでしょうか。

筆者が最も興味を持ったのは、字幕では（町議会）議長と訳されていた洪さんです。権勢をひけらかし、周囲を恫喝しまくるのですが、どうにも憎めない。台湾映画ではよくみられる小悪キャラです。一面、扱いにくい人物なのですが、他面では、愛人（？）の息子阿嘉がぶらぶらしているのを気遣い、郵便配達の職をあてがいます。また、町おこしのために、その時点では存在もしない地元バンドを参加させなければ音楽イベントの開催は認めないと主張し、関係者を困惑させます。しかし、この横紙破りのおかげで、海角七号宛の手紙は阿嘉と友子の目に触れることになるのですし、クライマックスである会場あげての「野バラ」斉唱シーンが実現するのです。

筆者には、洪議長と周辺の関係に、台湾政治基層部の一断面をみる想いがします。

国民党とともに大陸から台湾に移住してきた外省人の人数は、100万人＋αといわれています。大変な数ですが、その時点での台湾人口800万人超に比べれば全くの少数派に過ぎません。国民党が台湾で50年にわたる独裁、それも開発独裁の典型ともいわれる経済成長を実現しながらの独裁を維持するためには、力による抑圧だけでは不十分だった筈です。

そのために国民党が採用したのが、政治的には、李登輝元総統をはじめとする本省人エリートの登用であり、地方における本省人政治家の国民党への取り込みでした。

地方政治家たちは国民党内で地方派系と呼ばれ、党・政府官僚からなる中央派系とは別の権力系列をなし、この二系を束ねるのは国民党主席ただ一人というのが独裁時代国民党の権力構造でした。最終的な権力は中央派系が保持するのですが、地方派系は中央からの利益配分にあずかりつつ、台湾住民の生活に浸透し、国民党の支配を基層において支えたのです。

独裁の終焉とともに国民党も一政党にすぎなくなり、国民党内の権力構造と台湾政治の権力構造は切り離されました。しかし、台湾政治の基層における国民党地方派系のレガシーはまだまだ強力のようです。昨年末以来の各種選挙で国民党の旗色はあまり良くありませんが、その中で、12月に実施された各県議会議員選挙及び郷鎮長選挙においてだけは、国民党の得票率は民進党に約二倍の差をつけて、圧勝しています。

「海角七号」に描かれた、威張り散らしながら住民生活に密着し、面倒見がいいという洪さんの役割は、台湾政治の中ではまだまだ機能しているということでしょうか。

ところが、本年一月の立法院臨時会で、行政効率化等の旗印の下、主要市県における郷鎮首長及び議会の廃止を主眼とする地方制度法修正法案が可決されました。まさに、洪さんをなくしてしまおうという訳です。

国民党を基層で支える構造を国民党絶対優位の立法院が破壊しようとするわけですから、今後どうなっていくのでしょうか。興味あるところです。

なお、申しあげるまでもありませんが、以上はすべて筆者の私見です。（了）